Ⅳ おわりに

２年間にわたり，「活動する喜びをあじわい，自ら問いかけ，解決する力を育てる生活科指導の在り方」の研究主題に基づき，特に，「豊かな活動を促す環境構成の在り方」「活動意欲を持続し，自ら進んで活動できる支援の在り方」「意欲や気付き，活動の様子を累積的にとらえて，支援に生かす評価の在り方」の三つの視点から研究を進めてきた。基本的な考え方を明らかにし，生活科の指導の実態調査の結果を踏まえ，三つの視点に基づいて，それぞれ具体的な指導の手だてを考えて授業を構想し実践した。授業の展開を分析・考察した結果，次のようなことが明らかになった。

環境構成については，一人一人の子供の思いや願いが生きるように環境構成を工夫すれば，活動する喜び，自力解決できた充実感があじわえるようになることが分かった。第１学年「うごくおもちゃであそぼう」の実践での製作の場と試しの場を設定したことにより，お互いの作品や動きが見せ合えるようになり，発想が広がり，関心・意欲が高まり，製作活動に幅が出るようになった。第２学年「秋のみのりをあじわおう」の実践では，自分で作りたい料理別小集団のグループ編成をした結果，活動意欲が最後まで持続し，活動に深くかかわっていた。

支援については，一人一人の支援のための実態調査を行い，それをもとに個に応じた支援をすると一人一人の意欲が高まることが分かった。「うごくおもちゃであそぼう」の実践でのモデル提示では，子供のイメージが膨らみ意欲が高まった。「秋のみのりをあじわおう」の実践でのボランティア教師（母親）の導入は，技術的な支援が十分に行われ，母親の「生活の知恵」を学び，自力解決の喜びをあじわい効果的であった。

評価については，自己評価，観察による評価，面接による評価を組み合わせることにより，一人一人を的確にとらえられるようになり，それが一人一人に合った支援につながり，子供の意欲が持続するようになることが分かった。教師も一緒に活動していく中では，一人一人の見取りは難しいが，「秋のみのりをあじわおう」の実践のようにボランティア教師を導入すると，一人一人の観察に余裕ができ，多様な支援を行うことができた。

一人一人の子供が夢中になって生き生きと活動している姿は，まさに，活動する喜びをあじわい，問いかけている姿でもある。このような姿を求めて本研究を進めてきたわけである。一人一人の子供がどんな思いや願いをもっているのか，一人一人がその思いや願いを実現していくための環境構成の在り方，支援の在り方，評価の在り方の三つの視点に基づいた本研究で明らかになったことも多いが，残された課題もある。今後の研究課題として継続して取り組んでいきたい。